

第1回農林系アカデミー・農業大学校運営向上検討会議事要旨【確定稿】

日 時 平成30年6月20日(水) 13:30～15:00

場 所 県庁4階 特別会議室

1 知事あいさつ

- ・本県では、「人づくりと生産性向上」と「東京オリンピック・パラリンピックを見据えたブランドづくり」「安全・安心・健康づくり」の3つの柱で県政を進めている。
- ・その中でも「人づくり」が最大の課題。
- ・今月オープンした「清流長良川あゆパーク」も盛況で、2週間で16,000人の来場者が来て、体験学習を通じて、世界農業遺産を発信できるとともに、担い手育成にも通じる。
- ・林業のほうでは、4月に林業版のハローワークとして、就業相談から、技術習得、定着までをサポートする「森のジョブステーション」をスタートした。
- ・少子高齢化、TPPを代表とした市場開放の動き、国内市場の縮小、グローバル競争の激化などの問題に対して、この検討会を通じて、教育水準の向上や国際競争を含めた産学協働、市町村・行政との連携、生涯教育など、共通の課題などを洗い出しながら、時代に則した 対策を話し合えたらと思う。
- ・キーワードは、課題の共有、連携になると思う。
- ・3つの機関が課題を出し合って、共有と連携を議論するのは初めての試みなので、どのような意見が出るのか、非常に楽しみにしている。

2 検討会設置趣旨説明（農政部長）

3 座長選出

- ・各委員の互選により、涌井委員が座長に選出される。

4 各学校の取組み紹介

- ・森林文化アカデミー ・国際園芸アカデミー ・農業大学校の順で、各学校の現状と現在までの取組み、今後の取組みを説明。

<委員からの質問>

○B委員

- ・入学時と卒業時で、人数の変動はあるか。

森ア・・・高卒を対象としたエンジニア科は2年間で1人くらいの割合。(もともと登校拒否だった人などもいる。1年間休学して、復学した人もいる。)

園ア・・・ほとんどいない。たまにいる程度。

農大・・・年1人くらい。(寮生活になじまない、農業以外の職に就きたくなったなど)

○F委員

・各学校が悩んでいることはあるか。

森ア・・・収支計算ができる学生が育っているか。学校だけでは養えない部分があるので、インターンシップなどで企業体験などを行っている。

卒業後、即技術者としてやっていける人材を育成できているのかということを考えている。

園ア・・・技術革新が非常に速いので、外部から非常勤講師を呼んで対応しているが、新技術に対して、それをどれだけ学生に教えられるか。社会に出たときに一歩遅れた状態になってはいけない。

農大・・・農業関係者以外の方への知名度が低い。

○K委員

・卒業生がどれだけ活躍しているかで、注目を浴びることもあると思うので、卒業後の生徒については、どれくらい把握しているのか。追跡しているか。

農大・・・就農した学生にしては、普及指導員などからの情報で把握できているが、一般企業に就職した学生については把握できていない。

園ア・・・県外に就職した人については厳しいが、再度県内に戻ってきて就職する人もいる。卒業生のフォローについては、企業におじゃまして学生の状況や次への対応も含め、把握・フォローしている。

森ア・・・森林技術開発のコンソーシアムがあるので、そちらに就職した人は把握している。それ以外の方は、できる限り企業訪問などを通じて把握し、パンフレットやホームページ、学校でのパネル展示などをして、卒業生が何をしているのかを紹介している。

座長・・・森林文化アカデミーは起業支援もしている。(郡上踊りの下駄づくりやワラビ粉を作るワラビ栽培者などの事例がある)

5 意見交換

○座長

・グローカリズムと言われているが、世界は、グローバリズムが平準化されればされるほど、それぞれの個別の地域に対して、特異性を求めている。

・食材から、林産物、加工までいろいろな興味が出てきているが、それが収支として合うのかが問題。

・国内需要も必ずしも、大量生産が求められているわけではない。値ごろ感、希少価値なども認められている。

・岐阜ならではの取組みが重要と考えている。そのようなことを前提として、それぞれが連携して、効率よく岐阜のブランドの確立ができないかと思う。

・せっかくなので、3校が連携することで、効率よく岐阜のブランドづくりに役立て

ることがあったらと思う。

〇〇委員

- ・前学長として、園芸アカデミーは、農大とは隣接しているのでいろいろ連携した。
- ・森林文化アカデミーとは連携してこなかったが、造園緑化コースは、もっと連携できるのではないかと思う。
- ・新しい技術をどのように教えていくかというときに、壁面緑化や屋上緑化など、空間緑化の技術者が足りない現実があるので、そのようなところの教育をどうするかなど連携できないかと思う。

〇座長

- ・確かに教員の相互交流をやりながら、効率よくやっていけたらということはある。
- ・新技術という話が出たが、生物多様性国内委員会にも参加しているが、最近大きな問題となっているのが、遺伝資源の公平公正な分配原則の問題。種苗法の種について、世界では、統一して大量の種を供給していこうという動きで、食料の価格が安くなるから、遺伝子を改良してでもそういうものを出していこうという動きがある。
- ・一方で、遺伝資源をどのように守っていくかという問題がある。
- ・日本の原種をどのように管理して、大切にしながら、品種改良をしていくのかを考える必要がある。

〇F委員

- ・花を輸出しようとするが、海外から持ってきたものを輸出しようとしても無理。日本古来のもので、日本の文化を取り入れて作らないと、輸出はできない。
- ・岐阜県は0 mから3 0 0 0 mまであり、非常に様々な植物があるので、それをいかに商品に融合していくかが大切。

〇座長

- ・その通りであるが、この件については、多額の設備投資が必要になるし、専門の研究者がやることなので、1校でやろうとしても、限られた人員の中で取り組むのは難しい。大学との連携を進めないと、新技術を入れていくことは進まないと思う。
- ・岐阜県は、多様性に富んでいるので、いかにそこを強みにしていくのが課題と考える。

〇F委員

- ・そこが本当に重要。官学民一体となって、知恵を出し合ってやるのが革命になる。

○座長

- ・ひとつトピックスを出すと、来年北京で「国際園芸博」が開催される。驚いたことに、花や緑だけではなく、「Horticulture」をテーマにしている。特に果菜類がメインになっている。想像するに、今後、中国政府は、10億の国民への食料供給としての大量生産を考えながら、一方で高品質の果菜類を輸出の柱にしていきたいという戦略なのではないかと推察できる。
- ・そういった世界が多様なものを求めている中で、岐阜の資質を活かしながらどうしていくのかという事が、学校としても重要と考える。

○N委員

- ・岐阜には高低差もあり、多様性がある。栽培技術についても平地と高地の連携もできる。平地と高地の連携は昔から行われていたが、それをいかに今の時代にマッチさせて、スピード感を出し、量的、質的なものを作り込んでいくかが大事。

○座長

- ・我々の学校は、頭よりも先に五感を養って、動植物に対する愛情と技能を養う。その先に技術があり、後から頭脳を鍛えるという事をしている。上半身から下半身を鍛えるというより、下半身を鍛えながら上半身を鍛えていくといった教育を基本としている。その点について、採用する側から見たらどうか。

○E委員

- ・技術というのは、長年かけて身に着けていくものなので、それを本気になって目指していくという姿勢、好奇心を持っている人間であれば必ず高い技術を習得することもできる。
- ・そういう意味では、学校は土台を作っていく場であると思う。
- ・学校に国際的な競争力を付けるというよりは、社会に出た後にそれを目指していく人間を作る学校であってほしい。

○K委員

- ・最近の若い人は、農業、林業に限らず、ラクして、かっこよく儲けたいという考えがある。IoT・AIはそれを可能ならしめる。
- ・IoT化やAI対応が、それぞれの学校の課題であるのであれば、3校横串で課題に対応するという考え方があるのかもしれない。
- ・3校が個別にあることが有効なのかという議論もあっても良いのかもしれない。
- ・ここをきっかけに、社会に出てからステップアップできる仕掛けがあるのであれば、どこの分野でも有効な人材に成りうると考える。

○座長

- ・農大に聞きたいが、自営就農だけでなく、雇用就農が増えていると聞いている。ということは、若い人たちは、農業という将来のフィールドに魅力を感じているという兆しの現れとも考えられるがどうか。

○M委員

- ・入学生の半分の生徒が、将来は農業で生計を立てたいと思って入ってきている。そこには、感覚として儲けたいというものはあまりないと思われる。
- ・動物が好き、野菜を作った経験が忘れられないなどの理由が多いので、そこに根源的な職業観があると思うので、そこは大事にしている。

○座長

- ・最近では、逆に都会の人が農業にあこがれるという事が多いのではないかと。
- ・コンピューターの世界で、ストレス過多になっていて、自然の中で生きていくということが、精神的健康に一番いいということが選択理由にもなる。

○M委員

- ・オープンキャンパスなどを通じて、あこがれて入ってくる生徒もいる。
- ・愛知県などの都市部の高校生も関心を持ってくれることも多いので、そのような学生にどのように情報発信して、農大に導いてくるかが課題。

○座長

- ・三浦委員から、統合した方策も戦略の一つとして検討するべきではないかという意見が出たが、橘委員は、兵庫県立淡路景観園芸学校という、専修学校と市民教育学校を兵庫県立大学と一体化して専門職大学院として昇華させたプロセスを兵庫県側から見てきた経験があると思うが、そのあたりの良し悪しを率直に聞かせてほしい。
- ・前提として、淡路景観園芸学校というのは、世界3大景観学校と言われていて、一つは北米のナイアガラ景観園芸学校、もう一つはフランスのベルサイユ景観園芸学校があり、そこに並び称される学校として設立された経緯がある。

○H委員

- ・私自身は、兵庫県の職員として、淡路景観園芸学校の企画・設立に携わってきた。
- ・H11年に設立したが、最初は、花と緑のまちづくりを進める担い手を作ろうという形でスタートした。大卒者が対象で、学校教育法に基づかない学校だった。
- ・現在は、専門課程が兵庫県立大学の専門職大学院となり8年経った。
- ・それと、専門的な学校とは別に、一般の方を対象に1年間講座を開いて、街づくりや花緑関係の地域活動のリーダーとなる人材を育成している。

- ・岐阜県の3学校も、一般県民を対象にした講座をもっと広く受け入れていき、そういう人たちもしっかりと対象に位置付けていく方法もあると思う。3校全体で考えていく方向もあるのかと思った。
- ・そもそも、3つの学校が岐阜県らしい特色のある取組みをしているので、もっと広くPRする必要があるのではと思う。
- ・また、大学に編入する学生もあるということで、近隣の大学との連携もされているようなので、学生が次の段階へ行くこともあるのかと感じた。

○座長

- ・先ほどの世界3大景観園芸学校とは別に、オーストリアのウィーン市がウィーン園芸学校というものを作っている。
- ・そこは、ウィーンの街をきれいにするために、ウィーン市民が自ら園芸を学んで、フラワーポールやハンギングバスケット、市内の中に飾っていくための素材をそこで作り、同時にデザインなどが学べるフラワーアレンジスクールのようなものを併設して教えている。

○I 委員

- ・私は切花をフラワーデザインする団体に属しているが、日本の資格が乱立している。どの資格が本物なのかが分かりづらい。ある程度勉強したら資格が取れるものもあって、それで世の中に出て行って、先生として働いている人がいる。本質的な部分で力が足りていない人が多いと感じている。
- ・ドイツに少し住んでいた経験があるが、ドイツは小学校3年生の時点でどのような進路に進むのか決めて、4年生から学校が分かれる。花屋になるならその勉強をして実技を身に着けるという流れになっている。日本では、どのようなところで専門的な勉強すればよいのかが分かりづらい。大人になってからでも専門的な勉強できる場所があるとうれしい。
- ・個人のスクールなどはいっぱいあるが、しっかりした学校があるのはいいと思う。
- ・子供たちにとっては、現在はインターネットの動画で簡単に学ぶことができるので、だからこそ、ずっと学び続けることが大切ということを教えてほしい。

○J 委員

- ・農大から、独立支援ということで、うちで研修生して、3名の方が独立就農し、1人は雇用就農ということで、うちに就農している。
- ・話を聞いていて感じたことは、0mから3000mまでであるということは、それぞれ農業の形、地盤も違うし、それぞれの形を学んでいただくことは大事であると思うのと同時に、川の上流にいる限りは、森林の景観が隣接して繋がっているということや、水の確保ということは、農業と密接に関係していることを感じている。

- ・独立就農に関しては、イメージとしてはすごく憧れをもって来ていただける人が多い。女性も多く、どれだけ現実的な厳しさに耐えて達成感を味わえる教育ができるかということだと思う。農業といっても、生産物を作るだけではなく、基盤になる経営、管理方法等を学ぶ機会があったらありがたいと思う。
- ・また、6次産業化など、生産だけじゃない加工や販売の部分も学ぶことができたならもっと広がっていくと思う。

○座長

- ・今の話を聞いて、私が農業経済を学んだ時に教えられたことを思い出した。
- ・2つの点を覚えておけば良いと言われ、その1つは「身土不二」。その土地でしか取れないものを考えろということと、もう一つは、「利口な百姓、売れない種を買え」、すなわち希少作物で勝負しろということ。
- ・みんなが作っているものを作ったら、安くなるだけ。そこでしか採れないものを作り続けることが農業経済の基本だということを経験した今でも覚えている。

○C委員

- ・私の会社は、森林整備から木材加工までやっている会社で、森林文化アカデミーとは、長い間強いつながりを持っていて、先生からもいろいろ教えていただいているし、学生も受け入れていて、身近な学校に感じている。
- ・非常に優秀な先生に、1対1くらいの関係で教えてもらえて、やる気のある学生にとっては、本当にいい学校。全国に募集して回りたいくらい。学生募集に苦労していると聞いたが、もっと宣伝したらいいのと思う。
- ・最近の学生を見ると、肉体労働などにはあまり就きたくないという人が多い。機械化されているので、その操作はいいのだが、雨に打たれて下刈りをやらせたりすると、すぐに辞めてしまう。
- ・林業に従事する人が減っている中、この学校は非常に大切な学校。
- ・森林環境税も始まり、そのお金をどのように使っていくか、どのように森林資源を活用、管理していくかが大切。そのマネジメントをできる人が不足しているので、マネジメントできる人材の育成を望んでいる。

○B委員

- ・子育てと高齢者の支援などをさせていただいているが、まったく関係ない分野の人間としては、まず林業なども機械化されてきていて、女性でも活躍できる場が増えてきていることを初めて知った。
- ・今回、この会議の委員になったことで、事前に各学校のことを調べてみたが、一番驚いたことは、授業料の安いことに驚いた。
- ・しかも、資格などもとれて、次のスキルアップに夢も持てる学校が、こんな身近に

あることに驚いた。

- ・岐阜県内に留めておくことはもったいないと思う。これから学生が少なくなるので、もっと県外からたくさん学びに来てもらって、移住定住とも連携を取って、子供たちが定住する仕組みを作っていくと、岐阜県の人口も増えるのではないかな。
- ・子育て中の周りの人に話をしたら、こういう学校があることを知らない人が多かった。親が知らないということは、子供たちも知り得ない。
- ・今の子供は、体験をしている子供が少ないので、森、動物、土に興味を持つ子も少ないので、小さいうちから体験ができる機会を設けてもらえると、親も子供も選択肢が増えると思う。
- ・今、通信制の高校が増えてきている。いろいろな問題で人とのつながりが難しい子供が増えているので、そういった子供たちへの働きかけをしてもらえると、動物や木や森の中で癒されながら学べて、次のステップアップに繋がってありがたい。

○A委員

- ・例えば「清流アカデミー」のような統一的なコンセプトを立てて、バーチャルに学長さんたちが定期的に集まって、3つの学校を連携運営するような形はどうか。そこで、それぞれがやること、連携することを模索してやれると良いのではないかな。そうすると将来的に1つになることも考えられる。
- ・教育理念としては、学校が充実していけばいいのだが、行政としては、半分くらいが県外へ流出することが問題。県費をかけて人を育てて、県外に出ていくとなると問題なので、定住にいかにか結び付けるかが課題となる。
- ・中山間に住むと、林業も農業も両方やらなくてはならないので、希望によっては、移住定住を睨みながら、森林文化アカデミーに入学しても、1カ月くらいは他で農業や中山間地域の生活のあり方などを勉強するなどでもできると良い。木工に進みたいなら、それだけを勉強すればいいし、オーダーメイド型のカリキュラムとし、移住定住に直結するような教育があると良いと思う。

○座長

- ・アグリフォレストリーという森林を作りながら農業をやるという考えもある。おっしゃるとおり、中山間の生活は、平場の農業と違って、大きく作れば良いというものではない。農業をやれば林業もやり、漁業や町、全てが重なって一つの暮らしが成り立つ。今世の中は、その中で生まれたものを求めている。それをいかに市場化するかが大きな課題となっている。知事が進めている「清流の国」のコンセプトも上流から下流までの人々の暮らしの結びつきというようなことだと思うので、そういったことで3校が連携できれば良いと考える。

○F委員

- ・卒業生が、県内に勤めるべきというのは、県にとってはそうなのかもしれないが、もっと世界中から生徒を呼びこんで、卒業後に世界に羽ばたいていけば良いと思う。世界で活躍した時に、「清流の国ぎふ」の学校出身と言ってもらえればそれで良いと思う。
- ・岐阜には可児市に「花フェスタ記念公園」という世界一の公園がある。
- ・今、園芸アカデミーは、どこにあるかと聞かれたら、花フェスタ記念公園がある可児市にあると説明する。そうではなく、「花フェスタ記念公園」の中に園芸アカデミーを設置するとどうかと思う。そうすれば、園芸アカデミーは世界一の「花フェスタ記念公園」の中にあると言える。
- ・農業大学校も昔は試験場の隣にあった。そこに新技術があつて、一緒に学んでいた。一緒に土台づくりをしていたのに、当時のことはわからないが、なぜあの場所に作ったのかと思う。

○H委員

- ・淡路の学校も、作る時は県土整備部（公園緑地課）の所管だった。
- ・生徒も全国から来て、全国に就職している。議会でもよく県内に何人就職したかという質問が出た。
- ・しかし、そういう事ではなく、こういう特徴ある学校を持っているのが岐阜だということの良いのではないか。

○E委員

- ・中山間地域では、獣害に困っているが、猟師は高齢化して人数が減っている。狩猟の勉強ができる学校があると良いのではないかと思う。

○川尻森林文化アカデミー副学長

- ・森林文化アカデミーでは、高卒のエンジニア科は、年齢の関係で銃免許が取れないので、わな猟の免許をとっている。免許を取得し、獣害で困っている地域に貢献することが、地域に入りやすいポイントになると考えている。
- ・クリエイター科の生徒には、鉄砲の免許も取らせているし、採った獣を利用する勉強もしている。
- ・ドイツのロッテンブルグ大学との連携の中で、ドイツではわな猟が150年前に廃止になっているので、こちらから講師を派遣して教えたりもしている。

○座長

- ・狩猟の関係でドイツのロッテンブルク大学には、狩猟者を養成するための狩猟シミュレーターがあり、知事にも体験してもらっている。
- ・林政部で導入に向けた検討してもらっている。

○○委員

- ・花フェスタ記念公園の再整備ということが課題となっており、その中で維持管理の問題がある。イギリスでは植物園が園芸学校を持っていて、学校の生徒が、植物園を管理する中で、実践として学んでいる。
- ・国際園芸アカデミーは、公園の中にあるのが一番理想的だと思う。

6 知事所感

- ・3校の学校がこんなに褒められる機会は滅多にない。
- ・こういう会議を通じて、まずは3校の魅力の再発見というところから話が始まるのかなと思う。
- ・3つの学校の現状を知るうえで、大事な会議になったのかと思う。
- ・県の林業政策・農業政策・観光も含め、岐阜県の強みを探求・発見すること、それが岐阜県のブランドづくりにつながる。
- ・たとえば、清流長良川の鮎ということで、我々が思っている以上に岐阜県の山・森・川のつながりと、その中での営みが世界農業遺産としても価値のあるものであるということで、4月の国連の世界農業遺産大会でも、岐阜のこのプロジェクトが代表格として、世界中で唯一プレゼンの機会が与えられた。つまり模範例として説明してきた。
- ・我々が思っている以上に、いろいろな場に出ていくことで、気が付き、飛騨牛とか柿とかお酒とかイチゴとかいろいろ、外に出て行っているが、出ていくことで、我々も魅力を再発見できる。
- ・飛騨牛が出ていくことで、新しい肉料理をフランス人のシェフが考える。柿、イチゴの素晴らしさに気がつくことで、フランス人のシェフが新しいデザートの方を考える。ということで、それぞれに新しい魅力、強みを発見しながら、そこがうまく噛み合くと、そこからさらに飛躍していく。
- ・一方で、それをやる担い手が必要となる。担い手が足りないということで、担い手を確保する仕組みはできないかと考え、農業からスタートしたが、相談から研修・就農、地域の支えなど、あらゆることを丸抱えして、地域の方の協力も得ながら就農者を増やそうとしてやってきたが、これが有効ということで、今、林業や建設業にも取り入れてきた。
- ・そういった中で、県外の方がおいでになったり、いろんな立場の方が自分の人生をもう一回このトレーニングのシステムの中で、考えてみようということで真剣に取

り組んでいる。

- また、地域の方も商売敵ができるということではなく、仲間を作るしか生きる道はないんだということで、応援隊として協力いただいているということで、移住定住の受け皿にもつながっている。
- こういう強みの発見と担い手づくりの中で、この3つの学校の役割をどういうふうに見出していくかということが、我々行政の関心事。
- 今、研修センターを品目ごとに作っている。そこに、このアカデミーなり農業大学校がどのように関わっていくか、その前提として、3校の強みというものを、ポテンシャルを含めて、突き詰めていく必要があると思いますし、その一環として、フォーリングみたいなことを言われておりましたが、共通なものと、統合できるものと、それぞれが別々に異なって発展していくものを整理しながら、何か有機的なつながりを見出していけないかと話を聞きながら感じていた。
- それと、いろいろな女性の活躍の場ですとか、花フェスなどの公園との連携ですとか、子供の体験という観点からの場の提供であるとか、いろいろな要請が3校を知れば知るほど出てくるということで、どんどんそれは取り込んでいけるくらいの、懐が十分あるのではないかと思っている。
- あと、今日は、あまり議論が出ませんでしたけれども、教える側の人材育成というのは、どのようにやっていくのかという、あれもやります、これもやりますはいいのですが、その担い手をどうしていくのかという事をもう少し議論していく必要があるのかと思っている。